

# ケインズ経済学の動学化における ハロッドとロビンソン

——「ハロッド文書」による研究\*——

篠崎 敏雄

## I はじめに

R. F. ハロッドとJ. ロビンソンは、ともにJ. M. ケインズの指導を受け、また、ケインズ経済学の動学化にも努めた。しかし、このことについての二人の考え方はかなり異なっている。

ところで、この比較について興味深い出来事は、1970年のエコノミック・ジャーナル誌上に現れた二人の論争である。そこでは、まずロビンソンが「21年後のハロッド」<sup>(1)</sup>という論文を書いている。これは、ハロッドが、第2次大戦後の経済成長理論の出発点となった、“*Towards a Dynamic Economics*” (1948) を出版してから21年後に、振り返ってその学説を論評するというものである。これに対してハロッドは、同じ誌上の同じ号で、これへのコメント<sup>(2)</sup>を行っており、さらにロビンソンは、これに対し返答の短い文章<sup>(3)</sup>を載せている。この論争には、ハロッドとロビンソンとの間の、経済動学についての基本的な

---

\* この論文は、千葉商科大学の御好意で、付属図書館所蔵の「ハロッド文書」の一部を筆写させて頂いたものに基づいており、千葉商科大学当局に対し、厚くお礼を申し述べたい。

- (1) J. Robinson, “Harrod after Twenty-One Years,” *Economic Journal*, September, 1970, pp.731-37.
- (2) R. F. Harrod, “Harrod after Twenty-One Years: A Comment,” *Economic Journal*, September, 1970, pp.737-41.
- (3) J. Robinson, “Harrod after Twenty-One Years: A Reply,” *Economic Journal*, September, 1970, p.741.

違いがよく現れている。また、ハロッドはその3年後に、彼の晩年の代表作“*Economic Dynamics*” (1973)を出版しているが、この論争はこの書物に重要な影響を与えていると考えられる。

ここでは、千葉商科大学付属図書館にある「ハロッド文書」<sup>(4)</sup>を使って、二人のこの論争の背景を明らかにし、さらにはこの事を中心として、ケインズ経済学の長期・動学化における、二人の学説の比較を行ってみたいと思う。

先ず第Ⅱ節では、ロビンソンの「21年後のハロッド」における主要な論点について述べる。第Ⅲ節では、ロビンソンによる $g=s/v$ の定式化と差別型貯蓄関数の使用、および独占度概念の導入について述べる。第Ⅳ節では、ロビンソンの「21年後のハロッド」に対するハロッドのコメントについて述べる。第Ⅴ節では、このハロッドのコメントに対するロビンソンの答えについて述べる。第Ⅵ節では、ロビンソンの「21年後のハロッド」をめぐる論争の公表に関連した、エコノミック・ジャーナルの編集者C. F. カーター、ハロッドおよびロビンソンの間でやり取りされた手紙類について述べる。この手紙類は、「ハロッド文書」に含まれているものを利用した。第Ⅶ節では、以上のことを中心にして、ケインズ経済学の長期・動学化におけるハロッドとロビンソンとの比較について論ずる。最後に第Ⅷ節では、結びの言葉を述べる。

## Ⅱ ロビンソンの「21年後のハロッド」における最も主要な批判点

J. ロビンソンは、「21年後のハロッド」(1970)という論文の最初で、ハロッドの“*Towards*.”に対する最も主要な批判点を、次のように述べている。「制御されない資本主義経済はある「自然的」あるいは望ましい率で安定した成長を維持できそうにない、というハロッドの『動態経済学序説』の主張に不賛成な者はいないだろうが、(気まぐれを除いて)論理的にそれが不可能であるという彼の主張は驚くべきものであった。」<sup>(5)</sup>ここで、「自然的」あるいは望ましい率

(4) 丁寧には、「ハロッド教授来翰自筆書簡及び遺稿コレクション」。

(5) Robinson, “Harrod after,” pp. 731-2 (「21年後のハロッド理論」, 山田克巳訳『J. ロビンソン: 資本理論とケインズ経済学』, 34ページ)。

というのは、ハロッドの自然成長率 $G_n$ のことであり、安定した成長 (a steady rate of growth) とは、一定率での成長ということである。そこで、ある「自然的」あるいは望ましい率で安定した成長を維持するということは、与えられた自然成長率 $G_n$ に保証成長率 $G_w$  (均衡成長率) と現実成長率 $G$ が一致していることを意味する。この状態はまた、ロビンソンによって、黄金時代 (Golden age) と呼ばれている。ところで、この状態が実現するための必要条件は、先ず $G_w = G_n$ が成立するということである。ところが、ハロッドによれば、最初保証成長率 $G_w$ と自然成長率 $G_n$ が食い違っていれば、自動的に両者は (論理的にも) 一致する傾向はないということである。ところがロビンソンは、論理的には $G_w$ が自動的に変化して、 $G_n$ に一致することが可能であると考えているのである。そこで、上記のような批判がなされるのである。

ところで、ロビンソンによれば、ハロッドの議論は、 $g = s/v$ という公式によって具体的に表されている。そこでは、貯蓄率 $s$ は社会の習慣によって与えられ、資本産出比率 $v$  (その限界値と平均値は安定的成長においては等しい) は、技術 (technology) によって与えられるとしている。そして、これら $s$ と $v$ によって決定される $g$ を可能成長率 (the possible growth rate) と呼んでいるが、これは、ハロッドの保証成長率に当たるものである。そこで、 $g = s/v$ はハロッドの保証成長率を含む基本方程式に当たる。他方、自然成長率を $n$ で表し、これは、神と技術者によって独立に与えられるとしている。思うに、自然成長率は人口成長率と1人当り産出高の成長率によって与えられるので、神は前者を定め、技術者は後者を定めるということであろう。

続いてロビンソンは、次のように主張する。「資本利潤率 $\pi$ は、 $s$ および $v$ に影響を与えると考えなければならないから、異なる利潤率に対応して、ただ1つの成長率ではなくて、可能な成長率のある範囲があるに違いないという点<sup>(6)</sup>がまもなく指摘された。」これは、ハロッドの『動態経済学序説』(1948)が出版さ<sup>(7)</sup>

(6) *Op. cit.* p 732 (邦訳, 34ページ)。

(7) R. F. Harrod, "Towards a Dynamic Economics: Some Recent Developments of Economic Theory and their Application to Policy, 1948.

れた直後に出された、ロビンソンによる書評「ハロッド氏の動学」(1949)の一節のことを指しているのである。そこでは、貯蓄の供給について論じているところで、次のように述べている。「一点についてだけ述べれば、個人的な心理学による議論は、社会の貯蓄に対する主要な影響要因——所得の構成員間での分配——を考慮しないまま残してしまった。」<sup>(8)</sup>すなわち、ロビンソンの「21年後のハロッド」における最も主要な批判点は、「制御されない資本主義経済は、ある『自然的』あるいは望ましい率で安定した成長を維持することは、(気まぐれを除いて)論理的に不可能である」というハロッドの主張についてである。ところがそれは、ハロッドが、所得の分配の変化が貯蓄率を変え、それを通じて保証成長率(ロビンソンの言う可能成長率)の値を変えるということを取り扱っていないためである。そしてこのことは、『動態経済学序説』(1948)の出版直後にすでに指摘したことである、というのである。

ところでロビンソンは、ハロッドが所得の変化による貯蓄率の変化の効果を考慮せずに主張するように、「保証成長率の値が一つしかないということ」を、「ハロッドのナイフの刃」(“Harrod's Knife-edge”)<sup>(9)</sup>と呼んでいる。ところがこの言葉は、一般には、ハロッドの動学的均衡概念である保証成長率の均衡が非常に不安定であるということを表すものとして用いられている。そこで、後に述べるように、この言葉についてハロッドの誤解が生じるのである。

### Ⅲ ロビンソンによる $g=s/v$ の定式化と差別型貯蓄関数の使用、および独占度概念の導入

ロビンソンは次に、自分の主張を展開するために、上記の $g=s/v$ という公式について、独自の具体的な定式化を行っている。また、差別型貯蓄関数も使用している。

(8) J. Robinson, “Mr Harrod's Dynamics,” *Economic Journal*, March, 1949, p. 74 (「ハロッド氏の動学」, 山田克巳訳『J. ロビンソン: 資本理論とケインズ経済学』, 19ページ)。

(9) J. Robinson, “Harrod's Knife-edge” in *Collected Economic Papers*, Vol. III, 1965, p. 52.

まず、 $g=s/v$ の具体的な定式化を次のように行っている。始めに、純貯蓄は純投資の値に等しいから、貯蓄率 $s(=S/Y)$ は投資率 $I/Y$ に等しいとし、また、支配している利潤率の下での資本の存在量の値を $K$ で表す。そして、 $v$ の値を、1年間の純所得に対する（支配している利潤率の下での）資本の存在量の比率 $K/Y$ としている。すなわち、必要資本産出比率を平均概念で考えているのである。このようにして、可能成長率 $g$ は、以下のように資本蓄積率 $I/K$ に等しくなる。

$$g=s/v=\frac{S}{Y}/\frac{K}{Y}=\frac{I}{Y}\cdot\frac{Y}{K}=\frac{I}{K}$$

後に述べるように、ハロッドは、ロビンソンが資本存在量 $K$ という概念をこの公式（ハロッドの保証成長率を含む基本方程式に当たる）に持ち込んだことと、この式の中で平均概念の必要資本産出比率を用いたことを問題とする。

続いてロビンソンは、純利潤からの貯蓄率を $s_p$ とし、また賃金からの貯蓄率を $s_w$ として、差別型の貯蓄関数を使用している。この場合 $s_p>s_w$ であると想定することが出来るので、利潤と賃金の間の分配比率の変化は、貯蓄率 $s$ の値を変化させる。ロビンソンは、差別型貯蓄関数を、極端な古典派貯蓄関数（ $s_w=0$ ,  $s_p=I$ ）、古典派貯蓄関数（ $s_w=0$ ,  $0<s_p<I$ ）および賃金からも貯蓄がなされる場合（ $s_w>0$ ）について、均衡成長率（可能成長率） $g$ の可能な範囲を説明している。そして、 $s_w=s_p$ の時「ハロッドのナイフの刃」（すなわち唯一の $g$ の値の場合）に、限定されるとしている。

次にロビンソンは、独占度と利潤率との関係について述べている。利潤率は、所得の分配を通じて貯蓄率に、また直接に必要な資本産出比率に、影響を与える。従って、独占度が利潤率に影響を与えるとすれば、それが貯蓄率と必要資本産出比率を通じて可能成長率 $g$ に影響を与えることになる。すなわち、独占度を可能成長率（均衡成長率） $g$ を決定する独立の要因と考えているのである。ロビンソンは、独占度の説明のために、ここで「利用可能な労働が連続的に完全雇用されると仮定して、実現可能な範囲内のある安定的成長経路上にあるときの、体系の短期的均衡」について考察する。そして、「毎週の各商品の生

(10) Robinson, "Harrod after," p.734 (邦訳, 36ページ)。

産が設備の完全能力で続けられている」状態を完全競争としているが、それを仮定することは必要ではないと言っている。そして、次のように言う。「設備が正常な利用率で稼働されていることと、正常な年当り労働時間数で作業する労働力がほぼ完全に近く雇用されている事を仮定するだけでよかろう。そうすると、ある一定の物的な産出物のフローが存在する。」<sup>(12)</sup>ここで正常というのは、安定的成長経路 (a steady growth path) 上での正常ということで、偶然的変動に対するものである。従って、設備が正常な利用率で稼働されているということは、必ずしも完全能力で稼働されていることを意味しない。もし、その安定的成長経路に独占的要素があれば、正常な利用率は、完全能力での稼働の利用率より低くなり、また、その時の物的な産出物のフローは、完全能力での稼働の場合より少ないことになる。そこでロビンソンは、独占度について次のように言う。「その場合、価格の主要費用に対する正常な関係、または「独占度」が成立し、それは正常産出物に正常利潤率をもたらずであろう。」<sup>(13)</sup>ここで、その場合というのは、短期均衡で諸財の需給が一致し、均衡価格が成立している場合である。そして、その価格と主要費用との間の関係が、ロビンソンの言う「独占度」を表すのである。価格が主要費用に対して高ければ高いほど、独占度は高いということになる。また、設備の正常な利用率が、完全能力での稼働の場合より低ければ低いほど、「独占度」は高いということにもなる。このようにしてロビンソンは、次のように言う。「かくて、設備の正常利用水準は、そのモデルにおいて特定化されるべき追加的変数となる。」<sup>(14)</sup>すなわち、設備の正常利用水準は、独占度を表す一つの変数となるのである。

次にロビンソンは、この独占度と利潤率との関係について述べる。独占度は利潤率に影響し、利潤率はまた貯蓄率や必要資本産出比率に影響を与えることになる。ロビンソンは、独占度と資本からの利潤率との間の関係は、 $s_w$ の値に依存するとしている。そして、 $s_w=0$ の場合、 $s_w>0$ の場合および $s_w=s_p$ の場合に

(11) *Op. cit.*, p. 734 (邦訳, 36ページ)。

(12) *Op. cit.*, p. 734 (邦訳, 36-7ページ)。

(13) *Op. cit.*, p. 734 (邦訳, 37ページ)。

(14) *Op. cit.*, p. 734 (邦訳, 37ページ)。

分けて説明している。それによると、 $s_w=0$ の場合には、利潤率は独占度とは独立している。 $s_w>0$ の場合には、より高い独占度はより高い利潤率をもたらす。そして、 $s_w=s_p$ の場合には、(所得における利潤の分け前と)利潤率は、完全に独占度によって決定されるのである。

ここでロビンソンは、ハロッド・モデルの特徴とそれへの批判について述べている。ロビンソンは、このモデルは資本主義制度の若干の特徴を反映しているが、その他の特徴を反映していないと言う。すなわち、生産の見地からは、労働者と金利生活者と企業者の階級があるが、所得と消費の見地からは階級が存在しない。また、留保利潤も考慮されていないと言うのである。より詳しくは、次の通りである。「生産という視点からは、労働者、金利生活者、企業者という諸階級が存在している。他方、純利潤はすべて家計に分配され、純所得の賃金・利潤への分配の相違は家計間での所得の分配に大して影響を与えないように思われる。また貯蓄および支出に関してはすべての家計は似通っており——所得および消費という視点からは階級は存在しない。」<sup>(15)</sup>ロビンソンは、このように批判した後に、留保利潤、賃金からの貯蓄と利潤からの貯蓄の区別、独占度などを考慮した、現代資本主義経済により適切なモデルと考えるものを、提示している。

最後にロビンソンは、ハロッドが打ち開いた諸問題と、それについての過去20年間の論争の回顧について述べている。

#### IV ハロッドのコメント

ハロッドは、このロビンソンの論文に対し、エコノミック・ジャーナル誌の同じ号に、「21年後のハロッド：コメント」<sup>(16)</sup>という論文を載せている。ハロッドはそこで先ず、自分の見解の内容に対するロビンソンの理解が十分でないことへの不満等、一般的な反批判を述べている。次に、ロビンソンが取り上げ

(15) *Op. cit.*, pp.735—6 (邦訳, 38—9ページ)。

(16) R. F. Harrod, "Harrod after Twenty-One Years: A Comment," *Economic Journal*, September, 1970.

た、二つの主要な問題と考えるものについて反批判を行っている。すなわち、複数の均衡成長率の存在の問題と、ロビンソンの言う「ハロッドのナイフの刃」“Harrod's knife-edge”（ハロッドは、これを動学的均衡の鋭い不安定性を表すものと解している）の問題についてである。

ハロッドは、一般的な反批判については、二つのことを述べている。第一は、ロビンソンが、現実成長率という概念を使用していないということである。第二は、貯蓄率 $s$ と資本産出比率 $v$ への所得分配の影響（したがって、利潤率と成長率との関係）に関して、ロビンソンが述べたことについてである。

ハロッドは、第一の事柄について、次のように言っている。「ロビンソン教授は、現実成長率の概念を全く活用していないように思われる。彼女の論文に現れている $g$ は、もし私がそれを正しく理解しているとすれば、均衡成長率のことを指していると考えられる。<sup>(17)</sup>」ハロッドは周知のように、現実成長率、保証成長率（均衡成長率）および自然成長率の3種類の成長率概念を使用している。しかしロビンソンは、現実成長率概念を使用していないと言うのである。これはその通りであると思われる。

またハロッドは、第二の事柄については、次のように言っている。「その第3小節において、彼女は『資本からの利潤率は、 $s$  [貯蓄率] と $v$  [資本一産出比率] との双方に影響を与えると想定されなければならないということが、まもなく [すなわち、私の著書『動態経済学序説』の出版の後に] 指摘されたと述べている。私は、あたかもこの事実がすでに私の心の中に顕著に存在していなく、また私にとって何か新しいものであるかのように「それがまもなく指摘された」、という言葉について、穏やかな抗議をすることが許されるに違いない！」<sup>(18)</sup>」ハロッドによれば、貯蓄率 $s$ と資本産出比率 $v$ への所得分配の影響の問題（したがって、利潤率と成長率との関係）に関しては、すでに彼の『景気循環論』<sup>(19)</sup>（1936）において、詳しく取り扱っている。しかし、彼の経済動学の体系の

(17) *Op. cit.*, p.737.

(18) *Op. cit.*, p.737.

(19) R. F. Harrod, *The Trade Cycle : An Essay*, 1936.



基礎が築かれた「動態理論への一論」(1939)<sup>(20)</sup>では、単純化のため、いろいろな可能的利潤分配と交替的な成長率との結び付きについての念入りの分析には、立ち帰らなかったのである。そして、この「一論」を発展させた『動態経済学序説』(1948)でも、この仕方を踏襲したのである。彼は、このことについて、次のように言う。「一つの時には一つのことをしようと試みるという原則に基づいて、私は所得の分配の問題に深く立ち入らなかったのです。私は、計画している動学についての私の書物においても、そうしようと努めるでしょう。私は、この問題が私に対し「示され」ねばならなかったという考えに対する、私の「穏やかな抗議」を正統化したと思う。」<sup>(21)</sup>ここで、「計画している動学についての私の書物」とは、『経済動学』(1973)のことである。

なおハロッドは、独占度と均衡での利潤分け前との関係についてのロビンソンの見解について、次のように論評している。もし私がロビンソン教授を正しく理解しているとすれば、彼女は、一つの大きいありそうに無い場合を除いて、可能的な均衡の利潤分け前の範囲が存在し、その中で現実の位置は独占度に依存すると考えている。このことは、独占度をその体系における一つの独立した動学的決定因としているのである。このことは、その通りであるかもしれないが、私は独占度は、大きな影響を持ちそうにはないと考える。

以上が、ハロッドのロビンソンに対する一般的な反批判であるが、続いてハロッドは、ロビンソンが取り上げた二つの主要な問題と考えるものについて、反批判を行っている。一つは複数の均衡成長率の存在の問題であり、もう一つは「ハロッドのナイフの刃」の問題（ハロッドはこれを成長均衡の鋭い不安定性の問題と解している）である。

複数の均衡成長率の問題に関連して、ハロッドは、先ずミクロ静学の分野での複数の均衡の存在する若干の例について述べ、次のように言っている。「したがって私は、若干の決定因が与えられれば、動学的均衡の多数性が存在するで

(20) R. F. Harrod, "An Essay in Dynamic Theory," *Economic Journal*, March, 1939.

(21) Harrod, "Harrod after Twenty-One Years : A Comment," p.738.

あろうという考えに反対するような最初からの偏見は持っていない。私はただ、マクロ動学における均衡の多数性は、もしそれが仮に存在するとしても、ミクロ静学におけるよりも「可能性が<sup>(22)</sup>」小さいと見いだされるであろうという「直感」を持っているということ、付け加えるのみであろう。<sup>(23)</sup>要するにハロッドは、複数の均衡成長率の存在の可能性は、相対的に小さいと言うのである。

ハロッドは、このことに付随して、ロビンソンが資本の総存在量 $K$ という概念を分析に導入していることについて批判し、次のように述べている。「彼女が言及している私の書物において、私は慎重にこの概念の使用を避けた。それは、私の基本方程式には現れない。<sup>(24)</sup>」ハロッドがこの総資本存在量 $K$ という概念を使用しない理由については、ここでは特に述べていないが、後の『経済動学』(1973)においては説明されている。<sup>(25)</sup>しかし、このハロッドの理論的潔癖さは、彼の経済動学を非常に取扱い難いものにしており、またその学説を難解なものにしている一面もある。

ハロッドが、ロビンソンの $K$ の使用に対して批判をしたのは、ただその使用そのものだけでなく、その使用の仕方にもよるのである。すなわち、資本蓄積率 $I/K$ には、この $K$ という概念が含まれているが、ハロッドは、ロビンソンが産出高の均衡成長率が資本蓄積率に等しい( $g=I/K$ )としていることに對し、批判をするのである。このことについて、ハロッドは次のように言う。「しかし彼女が産出高の均衡成長率 $=I/K$ と言う時、このことは増分の資本—産出比率、すなわち年における $I$ に関係するものが、経済における平均的資本—産出比率に等しいということを意味する。<sup>(26)</sup>」この後半のことを記号で表せば、 $I/\Delta Y=K/Y$ ということである。続いてハロッドは、次のように言う。「私は、この仮定は

(22) 筆者注。

(23) *Op. cit.* p.739.

(24) *Op. cit.* p.739.

(25) R. Harrod, *Economic Dynamics*, 1973, pp 48—9 (宮崎義一訳『ハロッド経済動学』, 75ページ)。

(26) Harrod, "Harrod after," p.739.

大部分の場合において、大いに真実ではありそうにないと言いたい。すなわちそれは、ロビンソン教授が『ぎょうこう』と呼ぶだろうものによってのみ、真実であるだろう。私は、私の基本的動学定理において、 $K$ という概念の使用を避けさせたものは、部分的にはそのような落とし穴から護られたいという願いのためであったと思う。もし私が正しく解しているとすれば、彼女の論文の多くの部分は、この受け入れ難い仮定に依存しているのである。<sup>(27)</sup>このようにハロッドが、 $I/\Delta Y = K/Y$ という仮定を避けたのは、彼の動学が不均衡動学であるためである。

次にハロッドは、ロビンソンが取り上げた主要な問題の第二のものと考え、「ハロッドのナイフの刃」“Harrod's knife-edge”の問題について論じる。彼はこれを、動学的均衡の鋭い不安定性を表す表現と考えている。しかし実は、ロビンソンはこの言葉を、全く違った意味に使っているのである。すなわち、「ナイフの刃」という言葉を、「保証成長率（均衡成長率）の値がただ一つであること」のみを表すものとして使っているのである。<sup>(28)</sup>ここには、信じられないような誤解と意見の食い違いが存在するのである。

いずれにせよハロッドは、先ず次のように言う。「通常不安定性が存在するという私の主張は、現実成長と関係する私の自明の方程式（簿記的恒等式）と均衡方程式との相互作用に依存している。ロビンソン教授は前者の使用をしていないように思われるので、彼女と議論に入ることの出来る大地というものが存在しない。<sup>(29)</sup>」すなわち、よく知られているように、ハロッドの不安定性原理は、現実成長率を含む基本方程式と保証成長率（均衡成長率）を含む基本方程式との相互関係によって説明されている。ところが、ロビンソンの論文の中には、現実成長率を含む基本方程式が全く取り扱われていない。そこで、この問題についてロビンソンと議論する共通の基盤が無いと言うのである。もちろん

(27) *Op. cit.* p.739.

(28) cf. J. Robinson, "Harrod's Knife-edge" in *Collected Economic Papers*, Vol. III, 1965, p.52.

(29) Harrod, "Harrod after," p.740.

このことは、ハロッドの誤解に基づくものである。

またハロッドは、不安定性原理の不安定性を表すものとして、「ナイフの刃」という表現は是認されないと言う。それは、あまりにも鋭い不安定性を表しており、彼が考えているのはもっと緩やかな不安定性だというのである。ハロッドは、それを表す例えとしては「浅い丸屋根の頂点」“at the top of a shallow dome”を推奨する。彼の不安定性は、「ナイフの刃」の上の物体のようなものでなく、むしろ「浅い丸屋根の上」の物体のようなものであると言うのである。ハロッドは以前から、攪乱に対する反応が生じるためのありそうな時間として、6カ月を考えている。従って、「ナイフの刃」という表現は不適当なのである。<sup>(30)</sup>

さらにハロッドは、「ロビンソン夫人によって大いに強調されたこの不安定性原理」<sup>(31)</sup>は、私の成長理論全体の中で、今では重要な部分ではないとも言っている。ここには、ロビンソンの「ナイフの刃」という表現に対する明かな誤解が現れている。なお、ハロッドの「動態理論における一論」(1939)においては、「不安定性原理」は大きなウエイトを占めているが、その後はそのウエイトはかなり小さくなっている。

#### V ハロッドのコメントへのロビンソンの答え

ロビンソンの論文に対するハロッドのコメントへの、<sup>(32)</sup>ロビンソンの答えは非常に簡単で、僅か数行にわたるものである。その内容は二つのことから成っている。一つは、所得分配の変化と貯蓄率の変化との関係の問題である。もう一つは、「ナイフの刃」という表現に関する問題である。第一の問題については、所得分配の変化との関連での貯蓄率 $s$ の変化の問題を、ハロッドが取り扱っていないからといって、我々がそれを論ずることを禁ずることは出来ないという

(30) *Op. cit.*, pp.740-1.

(31) *Op. cit.*, p.741.

(32) J. Robinson, "Harrod after Twenty-One Years : A Reply," *Economic Journal*, 1973, p.741.

ことである。なお、ここで我々というのは、ロビンソン、カルドア、パシネッティなどのことである。第二の問題については、自分の論文は成長経路の短期の不安定性の問題には触れていないと言っている。要するに、二人の考えている「ナイフの刃」の意味が全く違っているということである。

#### V ロビンソンの「21年後のハロッド」(1970)に関する手紙等

ところで、以上で説明したような、ロビンソンとハロッドとの間の論争は、エコノミック・ジャーナル誌上に公に現れたものである。しかし、その背後には、これに先立ち、関連した多くの手紙等のやり取りが為されている。それらは、当時のエコノミック・ジャーナルの編集者の一人であったカーター (C. F. Carter) と、ハロッドと、ロビンソンとの間の手紙等である。そしてこれらは、千葉商科大学付属図書館にある「ハロッド文書」の中に収められている。それらは、筆者の調べたところでは、16通の手紙と1通の葉書と、それらの手紙に添付されたメモなどから成っている。手紙類は、ロビンソンやカーターからハロッドへ来たものが多い。逆にハロッドから出した手紙ももっとある筈なのだが、「ハロッド文書」には欠けたものが多い。しかし、手紙は原則として受取人の所にある筈なので、ハロッドが出した手紙がハロッド家にはないのは不思議ではない。ただ、ハロッドが出した手紙が若干「ハロッド文書」にあるのは、彼が大事な手紙はコピーを取っていたためかも知れない。<sup>(33)</sup>ところでそれらの手紙類を見ると、ロビンソンとハロッドとの間の論争の舞台裏が手に取るように見え、非常に興味深く、また学問的に有益である。私は、ハロッドが1973年に『経済動学』を出版した時、それと、この1970年のエコノミック・ジャーナル誌上での、彼とロビンソンとの間の論争との関連に注目した。この論争の内容が、かなり1973年の書物の内容に反映されているからである。そこで始めは、新しい経済動学の書物の執筆を始めていたハロッドが、その参考にするた

(33) 千葉商科大学付属図書館で閲覧させてもらったのは、文書のコピーであるので、ハロッドの手紙がオリジナルなものか、それともそのコピーであるのかは、よく分からない。

めに、ロビンソンに特に頼んで論争をしてもらったのではないかと思ったのである。しかし、論争の背後にある手紙等を見てみると、そうではないことが分かる。やはり、最初にロビンソンが、独立の意志で「20年後のハロッド」という名前で、ハロッドの『動態経済学序説』(1948)以後の経済動学の発展を振り返って、改めてハロッドの経済動学の批評をする論文を書いて、エコノミック・ジャーナルに載せようとしたということのようである。そこで、編集者のカーターが、それに対するハロッドのコメントを求め、それらを論争の形にまとめてエコノミック・ジャーナルに掲載したのである。しかし、この論争の際に、ハロッドはすでに『経済動学』(1973)を書き始めていたので、事実上この論争の結果が新しい書物の内容に反映されたのであろう。次に、この論争の間に三人の間でやり取りされた、これらの手紙等を順次紹介し、簡単な説明を加えてみよう。

(1) カーターからハロッドへの手紙(1969年8月22日)<sup>(34)</sup>(ロビンソンの“Harrod after Twenty Years”のコピー添付):ここでは、次のように述べている。「ジョン・ロビンソンが、ちょうど「20年後のハロッド」と名付けられた論文を送って来た。貴方はそれを見ましたか?もし見てないのでしたら、解釈について何か問題があったらいけないから、貴方にコピーを一部送りましょう。」そして、この手紙には、ロビンソンの論文の原稿のコピーが付けられているのであるが、その題は、この時点では「20年後のハロッド」になっている。これが、実際にエコノミック・ジャーナルに載せられるまでには約1年が経過したので、最終的には「21年後のハロッド」になったのである。

(2) ロビンソンからハロッドへの手紙(1969年9月2日)<sup>(35)</sup>:これは、ハロッドからロビンソンにあてた手紙の返事である。このハロッドの手紙が「ハロッド文書」に無いのは、この手紙がロビンソン家に留まっているためであらう。

(34) *The Papers of Sir Roy Harrod* (ハロッド文書), Part IV (1089-1107): The Joan Robinson Letters.

(35) *Op. cit.* Part IV (1089-1107).

この手紙では、三つのことが述べられている。まず、二人が考えている問題の違いについて、次のように述べている。「私は、もっぱら恒常的成長についての定式を取り扱っているが、貴方はむしろ、景気循環の側面を考えているように思われる。」これは、ロビンソンがもっぱら経済成長の長期的問題を取り扱っているのに対して、ハロッドは不安定性原理など短期的問題を重要視しているということであろう。第二は、総資本量 $K$ を導入したことへの弁明である。それは、ハロッドが述べていない資本からの利潤率というものを、ハロッドの体系に導入したからということである。第三は、貯蓄の極端な古典派的仮定のもとにおいて、 $g = \pi$ （均衡成長率＝利潤率）ということについてである。

(3) カーターからハロッドへの手紙<sup>(36)</sup>（1969年10月16日）：この手紙では、ロビンソンがハロッドの批判の結果、脚注を変えたこととか、ハロッドは1970年の12月号に短いノートを書きたいだろうが、ロビンソンの「21年後のハロッド」は、9月号に載せると予想されとか述べている。この時点では、ハロッドとロビンソンの双方の論文を同じ号に載せることは考えていなかったと思われる。また、この時点で題名が「21年後のハロッド」<sup>(37)</sup>に変わっている。

(4) カーターからハロッドへの手紙<sup>(37)</sup>（1969年11月13日）：これは、簡単な連絡の手紙である。ロビンソンの論文の写真コピー（ゲラ刷りのコピーと思われる）を同封したこと等が書かれている。

(5) カーターからハロッドへの手紙<sup>(38)</sup>（1969年11月21日）：これは、ロビンソンの論文についてのハロッドの手紙への、カーターからの返事である。内容は事務的なもので、ロビンソンの論文へのコメントは、元の論文より短くしてくれというようなことなどである。

(6) カーターからハロッドへの手紙<sup>(39)</sup>（1969年12月23日）：この内容は、論争の公表の形式についての、カーターからハロッドへの提案である。その要旨

(36) *The Papers of Sir Roy Harrod*, Part V (124) : Harrod, R. "Harrod after Twenty-one Years : A Comment", 1969.

(37) *Op. cit.* Part V (124).

(38) *Op. cit.* Part V (124).

(39) *Op. cit.* Part V (124).

は次の通りである。我々の意図は、貴方のコメントをロビンソンの論文と同じ号にすぐに続く形で公表することである。これは、ロビンソンの論文の脚注の追加の形よりも、貴方の望む訂正をより効果的に与えるし、もしこの追加をロビンソンに認めさせようとするれば、無益な手紙のやり取りが予想される、と。これから分かるように、始めハロッドは、ロビンソンの論文に対するコメントを、その論文の脚注の追加の形で載せようとしたが、カーターによって異議が唱えられたのである。そしてこの提案はハロッドによって受け入れられたらしく、実際の論争の公表の形式は、この通りとなった。

(7) ロビンソンからハロッドへの手紙 (1969年12月24日)<sup>(40)</sup> : これは、ロビンソンの論文に対するハロッドからのコメントの手紙へ、ロビンソンが意見を述べた返事である。その要旨は次の通りである。私の論文は、 $s$ が所得の分配から独立である時、何が利潤率を決定するのか? という問いを取り扱ったのである。また、貴方はその主題の取扱いにおいて、分配の理論に立ち入らなかったけれども、私はそれを付け加えたと思う。そして、貴方は何故 $K$ に異議を唱えるのか? と。ここでは、ハロッドが取り扱っていない、利潤率とその決定因の問題、および貯蓄率と所得の分配の関係の問題について述べている。さらに、ハロッドが直接にはその理由を説明していない、総資本量 $K$ の導入に対する異議について問うている。

(8) カーターからハロッドへの手紙 (1969年12月29日)<sup>(41)</sup> : これはロビンソンの論文に関するものであるが、手書きで判読が非常に困難であるので、省略する。

(9) ハロッドからカーターへの手紙 (1枚目欠如のため日付不明)<sup>(42)</sup> : これは、2枚あったらしいが、1枚目が欠けているために、日付ははっきりしない。ただ、内容から分かることは、1月の中頃から3カ月間、ペンシルヴァニア大学へ行く前に書いたものらしい。だから、12月の終わりか1月始めの頃のもの

(40) *Op. cit.* Part V (124).

(41) *Op. cit.* Part V (124).

(42) *Op. cit.* Part V (124).



らしい。残っている2枚目の内容は、ロビンソンの批評に対するコメント等である。先ず、すべての純利潤が家計に分配されるとハロッドがほのめかしたということに対して、自分はそのようなことは、どこでも言ったりほのめかしたりしたことはないと抗議している。次に、ハロッドの「ナイフの刃」に対するロビンソンの言及についても触れている。また、『動態経済学序説』(1948)の新しい版を書いていることについても述べている(結局これは、『経済動学』(1973)として後に出版されたものである)。そしてさらに、ハロッドのコメントの最適な語数や、原稿提出のぎりぎりの期限などを問合せている。そしておそらく、ペンシルヴァニア大学へ3カ月間行く前に、これを仕上げねばならないのだろう等と書いている。

(10) ロビンソンからハロッドへの手紙(1970年2月19日)<sup>(43)</sup>：これは、ハロッドの学説について書いた別の原稿の一部を同封して、ハロッドにコメントを求めたものである。

(11) カーターからハロッドへの手紙(1970年4月2日)<sup>(44)</sup>(ハロッドによる「21年後のハロッド：コメント」の要約添付)：ここでは先ず、ロビンソンの論文に対するハロッドのコメント(カーターはこれをノートと呼んでいる)を、エコノミック・ジャーナルの9月号に載せようと思うと書いている。そしてそのため、*Journal of Economic Literature*に送る要約を送ること等を要求している。そして、ここに添付されている要約は、その控えであると思われる。

(12) ハロッドからロビンソンへの手紙(1970年4月27日)<sup>(45)</sup>(“A Growing Economy”と題する、ロビンソンの手に成ると思われるメモ添付)：この手紙は、日付と宛名は明記されているが、何故か差出人の名が書かれていない。しかし内容から、ハロッドからロビンソンへ宛てた手紙であることは間違いない。

これはかなり長い手紙である。内容は、前掲の(10)ロビンソンからハロッドへの手紙に対する返事と考えられる。ロビンソンの手紙は、ハロッドがペンシル

(43) *Op. cit.* Part V (124).

(44) *Op. cit.* Part V (124).

(45) *Op. cit.* Part V (124).

ヴェニア大学に行っている間に出された訳だから、ハロッドの返事は、彼が帰ってから書いたと思われる。ハロッドは先ず、ロビンソンが自分の見解について、相変わらず間違った説明をしていることに対して、強く不満を述べている。そして、私が拒否する諸見解を私のものとし続けられることによって、私の立場を不利なものにすることは、不公正であるとも言っている。なおその際、成長理論についての新しい書物（『経済動学』（1973））を準備中であることも述べている。この本のことが、彼の手紙に度々出て来るということから、それだけハロッドがこの本に力を入れていたということが分かる。この手紙の後半は、「(10)ロビンソンからハロッドへの手紙」に添付されていたロビンソンの原稿に対する、ハロッドのコメントのノートである。それらは、21の項目について、箇条書にされている。その中には、例えば $K$ の概念を導入する必要は無いとか、「ナイフの刃」という表現に対する批判も含まれている。<sup>(46)</sup>

(13) ロビンソンからハロッドへの手紙（1970年4月29日）<sup>(46)</sup>：これは、ハロッドの27日付の手紙への返事と考えられる。その要旨は次の通りである。私は、1970年における貴方の見解と、1949年のハロッド・モデルとの間の区別をはっきりさせることを試みた。貴方は現在、保証成長率は企業の蓄積の欲求を表すと言うが、それは $s$ をして蓄積を支配せしめるということである。それはすなわち、貴方はハロッドの理論をケインズ以前の理論に変えているのである。貴方は私が誤解していると言うが、私は貴方以上に貴方を理解していると。これは、ハロッドが1949年当時（何故『動態経済学序説』を出した1948年でないのかは分からない）考えていたことと、現在考えていることが違って来ていると主張しているのである。

(14) ハロッドからロビンソンへの手紙（日付は不詳）<sup>(47)</sup>：これは、日付は記載されていないが、文中に明記されているように「(13)ロビンソンからハロッドへの手紙」への返事である。5月の始め頃にかかれたものと思われるが、内容はやや長めの手紙である。要旨は次の通りである。先ず、29日のロビンソンの

(46) *Op. cit.* Part IV (1089-1107).

(47) *Op. cit.* Part IV (1089-1107).

手紙の内容に関するいかなる点についても、私は、1939年以来見解を変えていないと主張している。続いて、ロビンソンが、ハロッドの書いたものを十分に理解していないとして、激しく抗議をしている。特に、ロビンソンが、現実成長率と保証成長率との区別を無視し続けていることを言っている。そして、一時点における企業の蓄積欲求の増加 ( $s$  の増大をもたらす) は現実成長を抑制する。これはケインズ的であり、私もこの点については、ケインズ的であり続けている。他方、企業の蓄積欲求の増加は、それが短命でなく、また間もなく反対方向に向けられるのであれば、保証成長率を高める。これは、ケインズのでも反ケインズのでもなく、動学原理であり、ケインズには動学は無いのだと言っている。

(48)

(15) ロビンソンからハロッドへの手紙 (1970年5月12日) : この手紙は、一連の手紙のやり取りの中で、特に重要なものであると思われる。それは、二人の間の手紙による論争の、ロビンソンによる一応の結論が述べられているからである。まず、 $s$ 、 $G$  および  $G_w$  の間の関係の理解について、合意が得られた喜びを述べている。「私は、貴方の最後の手紙を受け取って大変幸せに思っている。というのは、結局我々は意見が異なるのではないということを、その手紙が示しているからです。貴方は、『企業の蓄積欲求』の一時点における増加は、現実成長の抑制剤である』と言い、またそれは『保証率を高める』と言う。ここで『蓄積』は明らかに貯蓄を意味する。これは正確に、私が貴方の理論を解釈して来た仕方である。」続いて、意見の異なる点について述べる。「しかしながら、一つの理論を理解するということは、それと意見が一致するということと同じことではない。私は常に、現実成長率は諸企業の投資決意によって決定され、また、それらが一つの成長率を遂行している時には、貯蓄は所得の分配を通じて調整されるであろうと主張して来た。ハロッド定式として知られるもの、 $g = s/v$ 、に対する私の異議は、 $s$  すなわち純所得における純貯蓄の比率が、 $g$  と独立には与えられないということである。」これは、ハロッドとの手紙

(48) *Op. cit.* Part IV (1089-1107).

のやり取りを通じて、ハロッドの言っていることは分かったが、その内容に合意する事は出来ないと言うのである。特に、 $s$ が均衡成長率 $g$ と独立に決まるということに異議を唱える。ロビンソンの考えでは、 $g$ は利潤率を決めることによって所得の分配を決め、それが $s$ を決めるということである。

続いて、ロビンソンが、ハロッドの経済動学に始めて接した頃のことを回想している。「私は、1939年の貴方の論文の重要性を、その時には理解しなかったということを認める。私は、貴方の本を注意深く読み、しばしばその大きな重要性を認めた。」この1939年の論文というのは、もちろん「動態理論における一論」のことであり、本は1948年に出版された『動態経済学序説』のことである。ロビンソンは事実、1939年の論文については、他の大部分の研究者と同じく、無視していた。<sup>(49)</sup>しかし、1948年の書物については大いに関心を寄せ、それに対する書評的な論文を書き、続いて長年にわたり、ハロッドの理論に基礎を置く自己の動学理論の発展に努めて来たことは、周知の通りである。

また、エコノミック・ジャーナルに載せられる論争について、次のようにも言っている。「私は、何故貴方が私の解釈と意見が一致しないことをそれほどつらく思うのか、理解できない（今は、貴方は意見が一致しているように思われるが）。私は、読者達が、我々の間の論争から無邪気な楽しみを引き出すだろうと確信している。」事実、雑誌に載せられたこの論争は、意見の違いが興味深く、また楽しいものである。

<sup>(50)</sup>  
(16) ロビンソンからハロッドへの手紙（1970年5月21日）：これは、手紙による一連の論争の、後始末のような手紙であり、そこには次のようなことが書いてある。まず、ロビンソンの『資本蓄積論』（1956）に書いているハロッドの動学についてのノートを見てもらいたい。これは、保証成長率に対する私の見解を全く明かにしているし、私は、それを決して変えなかったと。そしてその後、7月にノーフォークのハロッドの屋敷を訪ねたいというようなことを書いている。

(49) J. Robinson, "Mr Harrod's Dynamics," *Economic Journal*, March, 1949.

(50) *The Papers of Sir Roy Harrod*, Part IV (1089-1107).

(17) ロビンソンからハロッドへの葉書 (1970年6月1日)<sup>(51)</sup> : これは、リチャード (カーン) と3人でお話をしたいという趣旨の簡単な葉書である。これから夏休みだし、論争も一段落したことだし、カーンも含めて3人で楽しくお話をしましょうということであろう。

このようにして、この最後の葉書の3カ月後に、ハロッドとロビンソンの論争を載せたエコノミック・ジャーナルは、発行されたのである。

## Ⅶ ケインズ経済学の長期・動学化におけるハロッド とロビンソンとの比較

ここでは、以上で論じて来たことと関連させながら、ケインズ経済学の長期・動学化における、ハロッドとロビンソンとの比較を、主要な点について述べてみよう。

第一に、ハロッドは、ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』<sup>(52)</sup> (1936) の出版より前から、自己の経済動学の思考を始めていたが、ロビンソンは第二次大戦後に、ハロッドの学説に基づいて、本格的に経済動学の研究を始めた。

通説では、ハロッドの経済動学的思考が初めて公表されたのは、「発展している社会における信用の拡張」<sup>(53)</sup> (1934) である。しかし、W. ヤングの「ハロッド文書」による最近の研究によれば、ハロッドはそれよりもかなり前から、未公表の論文やメモで、動学的思考を述べているのである。<sup>(54)</sup> そして1936年には、『景気循環論』で、その重要な要素の一つとして動学的思考が展開されている。また、1939年には、有名な「動態理論における一論」で、その経済動学の体系

(51) *Op. cit.* Part IV (1089-1107).

(52) J. M. Keynes, *The General Theory of Employment Interest and Money*, 1936.

(53) R. F. Harrod, "The Expansion of Credit in an Advancing Community," *Economica*, August, 1934.

(54) cf. W. Young, *Harrod and his Trade Cycle Group: The Origins and Development of the Growth Research Programme*, 1989, pp.16-25.

を一応完成させている。さらに1948年には、この内容を拡充した『動態経済学序説』を公表し、それが第2次大戦後の経済成長理論の発展の直接の出発点と成った。ところが、これに対してロビンソンは、動学的思考を始めたのは遅い。<sup>(55)</sup> 1936年に、ハロッドの『景気循環論』の書評を書いているが、そこでは、乗数理論と加速度原理の結合の問題には触れているが、新しい動学的試みについては全く無視している。また、「動学理論における一論」(1939)についても、全く関心を示さなかった。ところが、『動態経済学序説』(1948)が出版されると、経済動学に非常に強い関心を示し、ハロッドの学説に対するコメントや、ハロッドの学説に基づく自分の動学の展開を、度々発表するようになった。

第二に、ハロッドはケインズの理論を静学と見なし、その動学化を図ったが、ロビンソンはケインズの理論を短期・静学と見なし、その長期・動学化(『一般理論』の一般化)を図った。ハロッドは、古典学派の時代には存在したのに近代経済学の時代に殆ど消滅していた動学、特にマクロ動学の復興・建設に強い使命感のようなものを持っていた。そこで、静学と動学との二分法に焦点を当て、欠けている動学の部分を新たに建設しようとしたのである。ケインズの『一般理論』についても、それはプラスの貯蓄または投資を含んでいる点は動学的であるが、それを除けば全体は静学的であるとしている。そのため、全体を動学で統一すべきことを述べている。これが、ハロッドによる、ケインズ経済学の動学化である。他方ハロッドは、ケインズの理論は短期の理論で、自分の理論は長期の理論であるというようなことは、決して言っていない。<sup>(56)</sup> ところがロビンソンは、たとえば「『一般理論』の短期分析を補う長期動学理論」というような表現をしている。また、ケインズの『一般理論』について次のようにも言っている。「しかし、彼の分析は、資本の存在量と技術が所与である短期[の理論]をもって組み立てられていた。彼の分析は、膨大な範囲の長期の諸

(55) J. Robinson, *The Trade Cycle* by R. F. Harrod, *Economic Journal*, December, 1936.

(56) Robinson, "Mr Harrod's Dynamics", p. 68.

問題を残して、……。」<sup>(57)</sup>これで分かるようにロビンソンは、ケインズの『一般理論』を、静学であるというだけでなく短期理論であるという点に、かなり大きなウエイトを置いている。そして、『一般理論』を動学化するというだけでなく、長期理論化するという点にかなり大きなウエイトを置いている。

第三にハロッドは、貯蓄率に対する所得分配の影響を、「動態理論における一論」(1939)以後、事実上取り扱わなかったが、ロビンソンはこの問題を重要視した。これは貯蓄関数の違いで、ハロッドは比例的貯蓄関数を用い、ロビンソンは差別型貯蓄関数を用いたということである。ハロッドが、『景気循環論』(1936)では所得の分配の影響を考慮に入れていたのに、その後考慮に入れなくなった事情については、前節で述べた通りである。

第四にハロッドは、総資本量 $K$ の概念の使用を避け、資本産出比率(資本係数)も限界概念を使用した<sup>(58)</sup>が、ロビンソンは $K$ を使用し、平均資本産出比率を用いた。この違いは、ハロッドの理論的な潔癖さのためであると思われる。ハロッドが、特にその基本方程式において $K$ という概念を使わなかった理由については、『経済動学』(1973)において、次のように述べている。「ここで土地および鉱物資源について一言述べておかねばならない。伝統的経済学においては、これらは「資本」と区別されてきたが、私はこれは熟慮の結果であると思う。また、「土壌の天然かつ不滅の諸力」によって決定される土地の価値と、過去の土地改良に基づく土地の価値との間には古典的な区別があった。しかしこの区別は、全然操作困難なものであり、そのことが $K$ を基本成長方程式から排除したいま一つの理由なのである。しかし、 $C$ の評価の際必要となる今期の土地改良に対象化された労働量を評価することには、何らの困難もともなわないのである。」<sup>(58)</sup>ここで $C$ は、現実の限界資本係数なのである。また、ロビンソンが $K$ という概念を使用したのは、資本からの利潤率という概念を分析に導入するためであったということは、前節で述べた通りである。

(57) J. Robinson, *The Accumulation of Capital*, 1956, 3rd ed 1969, p. v (Preface) (杉山清訳『資本蓄積論』第三版「原著序文」3ページ)。

(58) R. Harrod, *Economic Dynamics*, 1973, PP. 48-9 (宮崎義一訳『ハロッド経済動学』, 75ページ)。

## Ⅷ 結び

以上のようにして、「21年後のハロッド」(1970)をめぐるハロッドとロビンソンとの間の論争の検討を中心にして、ケインズ経済学の長期・動学化における、ハロッドとロビンソンとの比較の問題を論じた。その結論としては、前節でまとめたように、それぞれの研究の出発点の事情の違い、方法論の違い、問題の重点とするところの違い、分析技術的な違い等を明かにした。ここでの研究方法の特に新しいことは、千葉商科大学の付属図書館にある、一次資料としての「ハロッド文書」を使用したことである。

この研究に「ハロッド文書」を使用した事のメリットとしては、次のようなことが考えられる。(1)ハロッドとロビンソンとの間の論争の背景(舞台裏)の事情が手に取るように分かり、学問的に興味深い。(2)この論争の、ハロッドの『経済動学』(1973)への影響は、エコノミック・ジャーナルに公表されたものだけでなく、関連した手紙類を見ないとよく分からないことが、この文書によって分かった。(3)その他、従来不明であった点が、少しは分かって来た。例えば、エコノミック・ジャーナルに現れた論争で、ハロッドの「ナイフの刃」の概念が、ハロッドとロビンソンとの間で信じられないほど異なっている理由等である。それは一つには、この問題がやり取りされた手紙の終わりの段階で現れたため、二人の意見の調整が十分行われなかったとも考えられる。

このように「ハロッド文書」は、ハロッドの経済学の新しい研究において、非常に貴重で重要な手がかりを与えてくれる。しかし、その利用は未だ十分ではないようなので、いっそうの利用が望まれる。

## 〈主要な参考文献〉

- [1] ハロッド教授来翰自筆書簡及び遺稿コレクション(ロイ・ハロッド文書またはハロッド文書)(*The Papers of Sir Roy Harrod*), 千葉商科大学付属図書館所蔵。
- [2] Harrod, R. F., "The Expansion of Credit in an Advancing Community," *Economica*, August, 1934.



- [3] Harrod, R. F., *The Trade Cycle : An Essay*, 1936.
- [4] Harrod, R. F., "An Essay in Dynamic Theory," *Economic Journal*, March, 1939.
- [5] Harrod, R. F., *Towards a Dynamic Economics : Some Recent Developments of Economic Theory and their Application to Policy*, 1948.
- [6] Harrod, R. F., "Harrod after Twenty-One Years : A Comment," *Economic Journal*, September, 1970.
- [7] Harrod, R., *Economic Dynamics*, 1973.
- [8] Robinson, J., "Mr. Harrod's Dynamics," *Economic Journal*, March, 1949.
- [9] Robinson, J., *The Rate of Interest and Other Essays*, 1952.
- [10] Robinson, J., *The Accumulation of Capital*, 1956, 3rd ed., 1969.
- [11] Robinson, J., "Harrod after Twenty-One Years," *Economic Journal*, September, 1970.
- [12] Robinson, J., "Harrod after Twenty-One Years : A Reply," *Economic Journal*, September, 1970.
- [13] Robinson, J., *The Generalisation of the General Theory and Other Essays*, 1979.
- [14] Young, W., *Harrod and his Trade Cycle Group : The Origins and Development of the Growth Research Programme*, 1989.